



# 九条はらまち

「はらまち九条の会」ニュース No. 9 3

2009(平成21)年2月27日(金)発行

流丁花

＜1902年、アメリカの小説家、スタインバック(1902～1968)の誕生日＞  
カリフォルニア州生まれ。大学中退後、別荘番や記者の職を転々としつつ、社会的視野のひろい社会問題を告発する小説をかいた。作品は『怒りの葡萄』『二十日鼠と人間たち』、また1952年、エリア・カザン監督、ジェームズ・ディーン主演で映画化され、一世を風靡した『エデンの東』＜右写真＞など。1962年ノーベル文学賞を受賞。



○「辛抱しなきゃいけないよ。だってトム、あたしたち貧しい者は、みんながいなくなっても生きつづける人間なんだもの。奴ら金持ちたちが、あたしたちを根絶やしできるもんか。金持ちは出世して死にまうと、その子供たちがダメなもんだから、それで死に絶えるのさ。だけどあたしたちはね、あとからあとから生まれてくるんだよ。」(『怒りの葡萄』)



## 3月中、南相馬市は改めて「非核宣言」の予定

■「九条はらまち」No.76・81・85・89・92でお知らせしてきたように、南相馬市の「非核宣言」は合併後無効の状態にあり、今年2月16日、「はらまち・小高・鹿島・相双教職員九条の会」は改めて再宣言をするよう要望書を提出しました。■今後の議会の扱いについて、3月7日付『朝日新聞』福島県内版で＜下コピー＞のように報道されましたが、3月中には他の宣言に優先して「非核宣言」を改めて宣言する見通しです。

# 合併「非核宣言」消えた

## 新自治体では無効

核兵器廃絶などを訴える県内自治体の「非核宣言」が合併新市誕生後、無効となっている。新市で改めて宣言していないためだ。旧3市すべてが合併前に宣言していた南相馬市では、地元の「九条の会」がこのほど、市と市議会に新市としての非核宣言を要望。これを受け、市と市議会は一体となって「非核」以外に20以上ある「無効都市宣言」について議論を進める。(田村隆)

## 「再宣言を」南相馬に九条の会

長崎市役所に事務局がある「日本非核宣言自治体協議会」のまとめでは、非核宣言をしている県内の自治体数は2月1日現在で40市町村。県内全自治体の67・8%にあたる。

「交通安全都市宣言」「暴力追放宣言」など3市町で計25あった宣言について「新市において定める」としていた。非核宣言は、旧小高、旧鹿島町と旧原町のいずれも議会が議決。3自治体の中で

る。非核宣言をしていない白河、伊達、南相馬の3市は、合併前の旧市町村では宣言していた。

非核宣言などの各種都市宣言は、合併で新たな自治体が誕生すると無効になる。このため合併協議会が協定項目で宣言の合併後の取り扱いを決めている。南相馬の合併協会は

同様に再宣言していない白河市の総務課は「旧4市町村の一体化を進める途上、宣言の機運が高まるのを待っている状況」という。

南相馬の要望書は「はらまち九条の会」など4団体が先月16日に提出した。昨年12月定例市議会の平和教育をめぐる一般質問で、青木紀男・市教育長が「非核三原則を含めた平和教育を推進する必要がある」と答弁したのを評価する内容で、改めて宣言することを求めている。

5日に開かれた市議会全員協議会では、各種宣言を執行部が議論し整理した後、議会でも検討する方針が議会事務局から示され、了解した。

核兵器廃絶平和宣言都市

核兵器廃絶平和宣言都市

暴力追放宣言都市

南相馬市役所前にある都市宣言の表示板。いずれも旧原町市時代の宣言のため、現在は無効状態

■旧市町村が非核宣言していた合併3市と宣言名(○は非核宣言し、○は旧市町村)

### ▼南相馬市

- 小高町「非核平和宣言」、
- 鹿島町「非核平和宣言」、
- 原町市「核兵器廃絶平和都市宣言」

### ▼伊達市

- 伊達町「非核平和都市宣言」、
- 保原町「非核・平和自治体宣言」、
- 靈山町「核兵器廃絶平和都市宣言」、
- 月館町「非核・平和自治体宣言」、
- 梁川町

### ▼白河市

- 白河市「核兵器廃絶平和都市宣言」、
- 大信村「非核・平和自治体宣言」、
- 表郷村、
- 東村

# 「改憲は自由に兵器を使うためである」

ノーベル物理学賞の益川敏英・京都産業大教授

＜3月8日、明治大学での「九条科学者の会」4周年記念講演＞

○「改憲派は、なぜ憲法を変えたがるのか。解釈改憲で自衛隊がノマリアまで行く時代。条文不備のせいじゃない。9条があったのでは出来ないことをやりたいからに違いない。つまり自由に兵器を使うということです。」「私は、子にも孫にもあんな思いはさせたくない。国家が国家の名のもとに始める戦争は嫌です。」と平和の講演をされました。



## 平和を創るには・・・

- ① 「武力では解決できない」
- ② 「証言や提言の積み重ねを」
- ③ 「弱い立場の人々の支援が必要」(講師・藤屋リカ)



2月28日(土)10時から12時半まで、ロイヤルホテル丸屋で、『パレスチナ・ガザ地区の人々』講演と映画の集いが、主催：相双教職員九条の会、後援：はらまち九条の会で開催されました。参加者約50名。

講演の講師は、JVC(日本国際ボランティアセンター)パレスチナ地区担当で、現地で活動されている藤屋リカさん。パレスチナの歴史や現在の置かれて状況もよく分かるお話でした。

また、2004年のイスラエル軍によるガザ攻撃のドキュメント映画『レインボー』(40分)を上映。「レインボー」という名は作戦名で、罪もない幼児を狙い撃ちして殺すなど、イスラエル軍の戦争犯罪を告発。怒りを覚えずにはられない内容です。

イスラエルの攻撃の背後に、大国アメリカやイギリスの支援があること、また日本のNGOによる支援の地道な努力が分かる、意義ある集いで参加者一同熱心に聞き入りました。

集いの感想を青田さんに<右>のように、書いていただきました。

想像できるだろうか。われわれの住む南相馬市よりやや小さい面積に、人口が一五〇万人。二〇〇八年暮れからわずかに二十日間、一、三〇〇人の死者とその数倍に及ぶ負傷者が、イスラエルの攻撃によってもたらされたことを。メデルディアの多くはがれきの山とモクモクと立ち昇る炎と煙の映像に、死者〇〇人という形でしかならぬ。現地地帯で支援しているJVCの藤屋リカさんによつて、ガザ攻撃の全貌とそこに暮らす人々の様子が『レインボー』という映画と共に伝えられた。歴史的にも複雑で根も深く、一言で語られるものではないが、今、ガザで何が起きているかという現実を突きつけられると、虐殺と破壊以外の何ものでもない。最も胸が痛むのは、がれきの中に子供のおもちゃが転がっている光景だ。これは何を意味するのだろうか。ついに今までのあつた普通の人の営み、生活、命が一瞬にして武力によって奪われることだ。藤屋さんの言葉を借りれば、被害者から加害

## 『ガザ地区で何が』

原町区西町 青田恵子  
(はらまち九条の会会員)

者に変わる時であり、空爆こそ最大のプライバシー侵害にあたり、空と地上から昼も夜も止むことのない攻撃はまるで、ビデオをリセットして何回も回しているかのようだという。人々は恐怖でパニックになり、イスラエルの物資統制により医療品も食料も電力もあらゆるものが極度に不足しているという。藤屋さんの活動は危険と隣り合わせではあるが、女性らしい支援が心に残った。例えば、栄養状態の悪い子供達に牛乳とビスケットを配給することだ。支援によつて紛争は解決しないが、人々に希望を与えることはできると語った藤屋さんの表情はとても輝いて見えた。藤屋さんのような勇氣も行動力もないが人間の英知で憲法を守ることはできる。九条こそ外交政策の柱たる日本が世界に誇れるものだ。藤屋さんは「ちょっと里帰りをして来ます」と言つて、又ガザへ戻つて行つた。